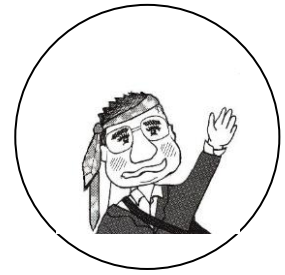


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「おっさんたちの旅」 鎌倉⑥

収玄寺から長谷駅に向かい、江ノ電で鎌倉駅に到った。さて、お腹が空いた。

グズ六が案内してくれたのが、「ひろみ」という天ぷら屋であった。小津安二郎映画監督などの鎌倉文化人御用達の店だと言った。なるほど風格のあるお店であった。

三ノ鳥居前にある有名な「鎌倉紅谷」でお菓子「クルミツ子」を買ってこい、と愚妻に言われたので、忘れない内に買うことにした。鎌倉詣の直前に、たまたまぼん子（ミトラ・スタッフ）から同じものをもらったが、美味しかったので購買命令が下った。

次に、三ノ鳥居をくぐり鶴岡八幡宮に参拝することになった。オメダBが観光ガイドを務めてくれた。

鶴岡八幡宮は、源頼朝の五代前の頼義がもともとの創建者である。頼義は平忠常を討伐する前に、京都の石清水八幡宮で祈願して勝利をおさめた。それを喜んだ頼義は鎌倉の由比郷鶴岡に石清水八幡宮の小社殿を建てたのが始まりである。およそ百年後に、鎌倉入りした頼朝がこの小社殿を現在の地に移し大規模な社殿を建造した。

ちなみに、わが故郷湯村温泉にも石清水八幡宮の小社殿がある。その一帯は八幡宮の荘園であったからである。

鶴岡八幡宮の大石段の左は「隠れ銀杏」と呼ばれている。前述したように、イチョウの大木に隠れていた公暁（くぎょう）が叔父（実朝）を殺した所である。

大石段をあがって振り返ると、参道の段葛（だんかずら）が由比浦に向かって一直線に引かれている。段葛は神さま、権力者の専用路であった。

おっさんたち三人が「まっすぐだな」などと眺めていると、いつのまにか横にすり寄ってきた中年男がいた。とつぜん日蓮宗系の一門流、それに連なる新宗教の悪口罵詈を始めた。この男の意図が分からなかった。もしや精神的疾患なら強く拒むとトラブルになるかもしれないので、われら三人は聞きたくなかったが聞いている振りをしてた。

グズ六BもオメダBも、日蓮や宗教に興味があるというわけではない。そうすると、わが輩がこの男を引き寄せたのか。それとも日蓮の首をはねようとしたものの生まれ変わりか。もし、そうなら鎌倉は今でも「呪われた都」なのかもしれない。とにかく、不快な思い出となった。

もう一人中年男性に会った。日蓮の辻説法跡を写真に撮ろうと思ったが、その男性がなか

なか動かない。みれば珠数と頭陀袋に団扇太鼓をもっている。しかし、どうみても僧侶のようにはみえない。熱心にお経を唱えているが、経本をみることなく読誦している。かなり年季のはいた法華経信者とみた。邪魔をしてはいけないので、先に併設の堂内にある日蓮立像をみることにした。それでもまだ読誦が続いていた。

寺もなく、支援者もいなければ、危機を訴える主張をどのように表現するか、その方法の一つが辻説法である。日蓮の場合、あらゆる場所、人の集まる町角がダルマの実践を説く移動寺院である。題目と説法の、その場所・その場が大寺院である。その前に人がいれば、その人はダルマを内蔵した“ブツダ”である。

そうして歩いていると、人は見るものである。辻説法跡から南に下ると、常栄寺というお寺、というより小さなお堂に到る。

一二七一年、日蓮は『立正安国論』を幕府に提出したが、佐渡島に流されることになった。罪人のように裸馬に乗せられ連行されているとき、有髪の老尼が近づき日蓮に胡麻のぼたもちを捧げた、という話が伝わっている。その老尼が住んでいた地が、今の常栄寺である。

おそらく老尼は、辻に立つ日蓮を見ていたのであろう。老尼が仏教のいずれに帰依していたか不明だが、情熱的にダルマと世の危機を説く日蓮の人となりを見ていたのであろう。

このぼたもちと老尼のエピソードは、なにかしら甘い味覚が脳の奥に感じられる。辻説法跡と常栄寺をセットで拝観していただきたい。

今回は、時間の都合で禅宗関係の寺院を訪れることができなかった。わずかに建長寺（臨済宗）の前を通り過ぎただけである。できれば円覚寺に行ってみたかったが、急ぎ足で再び鶴岡八幡宮を通過して日蓮宗の諸寺（妙隆寺、日蓮辻説法跡、妙本寺、常栄寺、本覚寺）に向かわなければならなかった。

鎌倉というと「禅」のイメージがわが輩に付着していた。特に円覚寺の名前だけはよく覚えていた。

学生するとき、哲学者Sの授業で『正法眼蔵』を学んだ。残念ながら、知識は右の耳から入り、左から抜けていったが、『正法眼蔵随聞記』を読んで少し分ったような気分になった。それで禅の世界に憧れていた。

下宿の大先輩Wは、円覚寺で大接心をつとめたことがある。「よい経験になるから、年末年始の参禅会に行ってみて来い」と後輩TとAに勧めた。円覚寺に入門したその夜、横に寝ているはずの参禅者がいない。その寝床を見た二人は、瞬間的に悟った。「あいつは脱走した」と。二人は一気に「無の境地」に達した。その途端に身体が宙に浮き、裸足で庭を駆け抜け、あっという間に塀を乗り越えていた。これぞ禅の境地である。

さて、二人は下宿に帰るわけにもいかず、Tの実家（大阪）に転がり込むことにした。「Aよ。おふくろから二・三発はなぐられるかもしれないが、一緒に来るか？」

意外にも、暖かい寝床とお年玉が与えられた。これが坐禅の功德というものである。

わが輩も一度は坐禅でも組んでみるか、とも思っていたが、この話を聞き、腰がひけた。山折哲雄（宗教学者）は、鎌倉は「呪われた都」だと言ったが、二人にとって鎌倉は「逆ズラの都」であった。

（お笑いエッセイを愛読する二人は、懐かしんで鎌倉に行くと相談しているらしい）